林　竹二　先生の思い出に寄せて

吉田章宏　淑徳大学教授・東京大學名誉教授

本誌読者の皆様とは、初めてお目にかかります。私は、林竹二先生と、かつて、斎藤喜博先生主宰の「教授学研究の会」の活動を通じて、お近づきになった年月を過ごしたことがある者です。林先生のお話を親しくお伺いできたのは、1972 年から 70 年代後半にかけての、恐らく数年間のことであったかと思います。或る事情が生まれ、その後、残念なことに、疎遠となり、そのまま終えることとなりました。しかし、親しくしていただいた時期に、先生と共に過ごした日々の経験は、昨日のことのように、今、私の心に生き生きと甦ってきます。

林先生が、その温顔に秘める情熱は熱く、志は高く、自己に厳しく、また気性の激しい方であったことが、私の印象には、強く残っています。いま記しても差し支えないと私が考える、二三の挿話を想起し、ご紹介しながら、今の私の思いと考えとを、思い浮かぶままに語らせていただくことにします。

「贋金づくり」のこと

林竹二先生は、当時、教育学研究者たちの研究活動を指して、「贋金づくり」だ、とよくおっしゃっていました。その研究活動の所産が、現実の教育実践に何等の善き変化ももたらさず、いわば現実のものを購うことが出来ない、という意味で、当時の「教授学研究の会」に集った研究者たちに、しばしば投げかけておられたお言葉です。もっとも、その言葉には、先生からの、励ましと批判、ユーモラスな皮肉と揶揄も、含まれていたかもしれません。林先生の悪戯っぽい笑顔が、この言葉を思うたびに、イメージとして、浮かんで参ります。

私は 1980-81 年に米国ペンシルバニア州ピッツバーグ市所在の Duquesne(デュケイン)大学の心理学部にフルブライト上級研究員として一年近く滞在していたことがあります。その繋がりで、いまは、欧州と米国とで交代に開かれる人間科学研究国際会議(IHSRC)の研究活動に、毎年参加しています。今年は、Norway の Molde 大学で、その第 28 回会議が開かれました。会議の場で、思いもかけず、哲学者の Lester Embree 氏と 28 年ぶりの再会を果たすことができたのです。デュケイン大学に滞在していた当時、氏は哲学科教授で、大学院授業で Alfred Schutz の現象学的社会学の世界へと、私たちを導き入れてくださった方です。今は、世界の現象学界で、活躍なさっているご様子で、Encyclopedia of Phenomenology の編者でもあります。懐かしさに、笑顔と笑いを交えた話が弾みました。一冊のご著書を贈ってくださいました。帰国して、その訳書が、『使える現象学』(和田渡/イ・ソンテ訳、ちくま学芸文庫)として出版されていることを知りました。その中で、同氏は、「学問研究」(Scholarship)と、「探究」(investigation)を区別しています。前者は、「編集、解釈、論評ならびに翻訳が含まれる」(同書、16 ページ)とあります。後者は、「ことがらそのものに取り組むこと」（同書、３０ページ）とあります。同氏は、現象学研究における「探究」の必要性と重要性を説いています。この指摘を読んだとき、私は、ふと、林先生の「贋金づくり」という言葉を思い出したのです。研究者の卵たちは、大学で本や論文を読むことを学びます。そして、大学を出て、論文や本を書くことに従事することになり

ます。しかし、「ことがらそのものに取り組む」ことは、「学ばない」こと、あるいは、「学べない」こと、が多いのです。それが、教育研究における「贋金づくり」に繋がって行くのではないでしょうか。しかも、「贋金づくり」でも、大学の教育研究者としては、何とかやって行けます。林先生が、最晩年に、教育研究を自らの授業実践という在り方でなさったことには、後に続く者たちに、研究者の在るべき姿を実践によって自ら示すという意味も、もちろんあったでしょう。しかし、その根底には、自らの「贋金づくり」としての在り方を、内面的に厳しく自己批判して、それを克服しようとする意志も、あるいは、隠されていたのかも知れない、と今の私には思われるのです。教育心理学の世界に生きていた私が、斎藤喜博の教育実践の世界に出会い、神谷美恵子や荻野恒一の現象学的精神病理学の世界を通して現象学の世界に惹かれるようになったのも、実は、「学問研究」のみに留まらず、「探究」を生きることを通して、「贋金づくり」である境涯から抜け出したい、という自覚されてはいないが強く深い思いがその根底にあったのではないか、と今にして思うのです。

入院中、病室での板書の練習

全国の小学校での授業実践に「行脚」しておられた林先生が、突然、病に倒れて入院なさったことがありました。脳梗塞だったとか、後から伺ったことがあるように覚えています。さて、その病が多少とも癒えて、少しお元気になられたとき、先生が直ちになさったこととは、不自由な身体をおして、小学校での授業の準備としての「板書」の練習だったと伺いました。驚きました。もちろん、「リハビリ」としての意味もあったのでしょう。しかし、それにもまして、療養中の病室に小黒板を持ち込んで、小学校の教室を思いながら、「板書」に励む先生のお姿を想像したとき、林先生の小学校での授業に取り組む真剣でひたむきな姿勢が、鬼気をもって迫って来る思いがいたしました。生半可な「学問研究」ではなく、「腹の底からの納得」を求めに求めて、教育の現実の「探究」そのものを生きる姿であり、さらには、現代の日本に生きている子どもたちと共に「生きる」姿、さらには、人間「探究」の姿そのものだ、とも感じられたのです。そのひたむきさが、先生が全国で出会う多くの子たちの人間としての心を打ったのだ、と私は思います。蘆田恵之助の「共に育ちましょう」の言葉も浮かんできます。ふと、先生の特徴のある枯れた筆跡の文字が、思い起こされて来ました。目に浮かぶようです、背を少し丸めて、風呂敷に包んだ教材を手に、小学校の廊下を、スリッパで教室に向かう先生の後ろ姿が・・・。

＜小学校での教育実践＞と＜大学での教育実践＞

教育研究者の世界で、「教育実践研究」と言えば、少なくとも一般的には、研究者が他者である教育実践者の実践を研究する、という意味に用いられることが多い様に思います。たとえば、教育研究者が、蘆田恵之助、斎藤喜博、武田常夫、倉橋惣三、・・・、フレーベル、ペスタロッチ、スーザン・アイザックス、・・・、などなどの実践を対象として研究をするというような場合です。それに加えて、近頃では、教育学や心理学の世界でも、たとえば小学校の教育実践者と共同して、その実践者の実践を研究するということも、広く行われるようになったようです。確かに、とても喜ばしいことです。ただ、私は、或る時から、その在り方は、一時的にはそれで良いとしても、もっと長い目で見れば、さらに「腹

の底からの納得」の得られる実践と研究の在り方が求められているのではないか、という思いが生まれてきました。それは、「第一人称心理学」の可能性を、多種多様な心理学の人称性と関連して、考えるようになったからだと思います。現代心理学では、長い歴史の経緯から、「哲学」から独立して「科学」となることを至上命題とし、内観主義心理学の隆盛と崩壊、行動主義の隆盛と崩壊、などの歴史を経過して来ました。そして、これまで、一貫して「一人称心理学」をタブーとして来ています。現在の心理学は、学問としては、あくまでも「他者の心理学」なのです。しかし、近年の臨床心理学の隆盛によって、上記の歴史にも拘わらず、「第一人称科学」の可能性が提起されるようになりました。その提起者の一人が、Eugene T. Gendlin(ジェエンドリン)という、米国の哲学者で心理臨床家の方です。象徴的なのは、“Primacy of Perception”に対して、“Primacy of Body”を唱えて、「フォーカシング」(焦点化)と呼ばれる方法によって、自らの身体で感じる感覚("felt sense”)を重視しておられることです。蘆田恵之助が、岡田虎二郎の静坐に学び、「腹が据わる」ことを大事にしていたことが思い起こされます。研究者の問題は、「腹ができていない」ことではないか、とも思われるのです。それは、「他者の＜学問研究＞」に終始しているからではないでしょうか。仮に、いわゆる「研究者」が、「自己の＜探究＞」に向かったらどうでしょうか。「腹が据わる」ことは避けられないでしょう。小学校の教師は、自らの教育実践を、自らの身体を他者の目に曝しつつ、喜びと哀しみを生き、自らを研究することにより「腹が据わり」ます。大学の教育研究者にも、大学における自らの大学における教育実践を、自ら研究することにより、「腹を据える」ことが求められるのではないか。そう考えるように、私はなりました。小学校の教師は、小学校の教育実践を研究する。保育園では保育実践を、幼稚園では幼稚園教育実践を、中高では中高の教育実践を、そして、大学では大学の教育実践を、それぞれが、自ら実践し自ら研究する、それこそが第一の基本ではないか。自らの大学教育の実践が貧しいような大学研究者による、たとえば、小学校教育の実践研究など、およそ信じるに足りない、と私には思われるようになったのです。この思いの形成には、私の場合、五十年近くを要しました。それほどまでに、１）「研究者」をめぐる分業としてのその仕事に関する固定観念、２）「第一人称心理学」の、さらには「第一人称科学」の、「タブー視」による研究の視野の限定、そして、３）大学教育では全く教えられたことが無なかった「教育実践を生きる」ことへの自信の欠如、などなどが、互いに重なり合って、その思いの形成の大きな妨げとなっていたのでしょう。小学校教師が、自らの教育実践を研究し、仲間の教師と伝え合い、それぞれの実践研究の成果を共有し、それぞれの教育実践を豊かにして行く。大学教師が、自らの教育実践を研究し、仲間の教師たちと伝え合い、それぞれの実践研究の成果を共有し、それぞれの教育実践を豊かにして行く。時には、小学校の実践と大学の実践との間の、相互乗り入れも、意義深いでしょう。しかし、その根底には、それぞれの職場での実践と研究が、まず、なければならないのではないでしょうか。小学校教師から世界的研究が生まれ、大学教師から世界的教育実践が生まれたら、どんなに、素晴らしいことでしょう。小学校教師による教育実践を大学研究者が「他者研究」としてのみ行う実践研究には、その根底に、教師と研究者の間の相互蔑視が秘匿されているならば、真の永続的価値は無いと思います。互いの信頼と尊敬の上に築かれる「腹の底からの納得」が得られないからです。そこには、「知行合一」も「言行一致」も見られないからです。

林竹二先生は、Gendlin による「第一人称科学」の提唱には、きっと賛成してくださったのではないか、と私は思います。「腹の底から」の自信もなく、いまだに、貧しい実践体験しか持てない年老いた私が、勤務大学の大学院生による「第一人称科学」的性格をもつ研究論文集を、私の大学院教育の実践報告としての意味も込めて、私の編著書『心に沁みる心理学』(川島書店、近刊)として出版することになりました。Gendlin さんのご好意により、特別寄稿「第一人称科学へのいざない」も収めます。「腹の底からの納得」が出来る実践と研究を求める方々に、お読みいただけたら、と思います。

以上、林竹二先生の思い出に誘われて、感謝の念をもって、書かせて頂きました。